



街の縁側で遊び、語り、安らぐ



クニハウス  
愛知県名古屋市千種区



ほっと一息つきたくなかった／誰かと語りたくなかった／親子で遊びたい／介護や育児の悩みを聞いてほしい／子ども同士で遊びたい、家事や学校、職場の悩みから開放されたい／散歩の途中、一服したい／こんな気持ちを抱いたときに街中にふらっと立ち寄れるスペースがある。それがクニハウスだ。代表の丹羽國子さんが看護師を退職したのを機に、自宅を改装して九九年に開設した。当時の仲間は六人。その仲間は今は十六人に広がった。日々の運営はメンバーが当番制である。

おばあちゃんが閉じこもりがちにならないようにとその家のお嫁さんが「なにか仕事ない?」と来たので、「それじゃあ、お昼ご飯を作るの手伝ってもらおうかな」という具合に、お客さんとして利用してもらっただけでもない。この日はクニハウスのメンバーも加わっている健康福祉を考える会による介護保険制度の意識と実態の調査（実施は九月予定）についての会合があった。その人たちのためのお昼ご飯を作るというわけだ。

三々五々やってきては三々五々帰っていく、そんなクニハウスでひとしきりおしゃべりをして帰っていくおばあちゃんに「ここに来てグチを言うだけでも気分が違うでしょ」と笑いかけていた。「ほとんど毎日来るよ」という小学六年と六歳の兄弟もいた。乳幼児とその親や小学生、中年男性や障害のある人、お年寄り、いろ





いろいろな人が地域には住んでいる。その人たちが、自由に立ち寄る場所、それがクニハウス。

「最近の家族は、共同生活ではなくて支配する生活になっていっているのではないか」と丹羽さんは言う。「だからこそ、家庭と学校の生活に閉じ込めるのではなく、地域で育てなければ生活の知恵がなくなる」。子どもをめぐる事件があいつぐ昨今の状況についても「言葉で命の大切さを教えてもダメ。そういうものは単に知識に過ぎない。例えばリンゴの皮むき競争なんて学校でやったらいい。そういう「生活」を教えることで知恵を身につけることが今欠けている」と、丹羽さんと話している。知識ではなく知恵を出すことを教えることが大切だという話がたびたび出てくる。その時の視線の鋭さが印象的だ。

昨年度の利用者は、子どもたちやお年寄り、若い親子を中心に延べ二千七百人になった。新聞やテレビなどに取り上げられることもあり、見学者も年々増えている。介護や子育ての悩み相談も受け付けている。

手押し車を押しながらかやってきたおばあちゃん、「ちよっと友だちと喫茶店で待ち合わせだから、その前に」と立ち寄った。ひとしきり話をしてから「リフレッシュできましたわ」とまた手押し車を押しながら出かけていった。夏でも窓とドアを開ければ風が通り抜ける。外気と三度は違うと言う通り、実に気持ちのいい



「縁側」だ。冬場は「ちょっと暖まらせて」といって休んでいく人もいるという「縁側」とはそもそも昔からそういうものだった。そういうものが今ではほとんど失われて、わざわざ探さなければならぬ。それでも見つかれば、まだいい。みなさんのまちにはこんな「縁側」が見つかるだろうか。

副代表を務める沢柳つばきさんは、自身が病気を乗り越えて、四十分の道のりをリハビリを兼ねて通ってくる。柳沢さんは言う。「周辺のみなさんの理解と協力があったから続けてこられたんじゃないでしょうか」。

やって来た人が思い思いの過ごし方をして、そして帰っていく。特別な企画やイベントをやるわけではない。そこにちょっと腰掛けられるところがあり、そこにちょっと話ができる相手がいる。そんなクニハウスは、まさに街の縁側なのだった。

連絡先

クニハウス

〒464-0073

愛知県名古屋市千種区

高見1-8-23

開館=月・火・水・金・土

午前10時~午後4時

TEL 052-761-5234